

# ロサンゼルス奄美出身者の移住と生活

田 島 康 弘

(1993年10月15日 受理)

Amami Migrants in Los Angeles

Yasuhiro TAJIMA

## 第1章 研究目的

本稿は、現在ロサンゼルスに居住し生活する奄美出身者の移住のプロセスおよびその後の生活確立過程を、当事者自身からのききとりやアンケート調査等に基づいて、できるだけ明らかにしようと試みたものである。

筆者はこれまで奄美研究の一環として、奄美出身者の動向に関心を持ち、彼等の移住のプロセスや都市部における居住と生活さらには集団形成状況等について、いくつかの報告を行ってきた<sup>1)</sup>。本稿は、こうした一連の研究の一部をなすものである。

移住に関する研究は、これまで人口学、経済学、社会学、地理学などの諸分野から行われてきたが、筆者の立場は「空間における社会現象<sup>2)</sup>」を研究対象とする社会地理学的立場からのアプローチである。

アイルズによれば、近年の社会地理学的研究は、レlevance革命<sup>3)</sup>をへて「社会問題の地理学」的色彩を強めているという。今ここで、彼が整理する現代における社会地理学の3つの潮流<sup>4)</sup>を筆者なりに解釈すると、以下のようなになるだろう。すなわち、第1の潮流は社会福祉の現状などを諸指標を使って検討するパターン識別的研究であり、第2は社会問題のパターン分析からプロセスや原因追究の方向へと進んでいる潮流であり、第3は社会集団毎の空間認識の相違に注目し、認識的・主観的側面を強調する潮流である。

ところで、ここで言う「社会問題」ないし「社会問題の地理学」の具体的内容は、「人種・健康・犯罪・貧困・汚染」のような現象に関する研究の増大が見られるということであり、これらの研究がとりわけ第2の潮流の方向で行われてきており、本研究もこうした研究動向や分析方法を考慮しつつ進められている。

ただ、本研究はあくまでも事実の把握それ自体を主たる目的としており、社会地理学方法論の検討を中心に論じたものではない。日本においては、社会地理学的研究そのものがきわめて不十分であ

り、こうした中では、現実を対象とした分析が更に積み重ねられる必要があると筆者は考えている。

## 第2章 アメリカ合衆国の奄美出身者

### 第1節 アメリカ全土の奄美出身者

1989年3月、筆者はアメリカ合衆国に居住する奄美出身者を尋ねてアメリカに渡った。事前に得られた情報は、鹿児島県庁における情報と、喜界島小野津出身者により作成された「年輪<sup>6)</sup>」など奄美郷友会関係からの情報の2つであった。

県庁では、アメリカのいくつかの都市における鹿児島県人会の存在と各会長氏の住所や電話番号等の連絡先を知ることができた。県人会の存在する都市はロサンゼルス、シアトル、シカゴ、サンフランシスコ、サンディエゴおよびハワイのホノルルとヒロとであったが、このうちサンフランシスコ、サンディエゴ及びハワイに行くことは出来なかった。残りの3都市の県人会々長氏には直接面接し、奄美出身者の所在を尋ねたが、シアトルでは全く思い当たらないということであり、シカゴでも数年前に1人いたが、今はその人とも音信不通でその他にはいないということであり、さらに、ロサンゼルスの場合も、会長氏からの手掛りはほとんど得られなかった。

また、県庁には「南加州鹿児島県人史」(1975年発行)が存在し、この中の名簿から、1974年現在のロサンゼルス及びその周辺の市郡別出身数がわかる。これによると、県内で出身者の多い地方は、川辺郡の138名、指宿郡の90名、日置郡の40名、始良郡の23名などであり、大島郡からの出身者はわずか2名が記載されているにすぎなかった。しかし、このうちの1人(A. K. 氏)との面接により、筆者はロサンゼルス奄美会の存在を知ることができたのである<sup>6)</sup>。

次に、「年輪」に掲載されている「アメリカの小野津会」の各氏を頼りに、あるいは鹿児島・東京などに居住する小野津関係者から得られた情報に基づいて、筆者はニューヨーク周辺及びロサンゼルスの奄美出身者を尋ねた。ニューヨークについては既に別稿<sup>7)</sup>で紹介したとおりで、フィラデルフィアのK氏、コネチカット州スタンフォードのN氏の関係者には面会してお話しを伺うことができたが、アメリカ小野津会の名簿記載者の中で既に亡くなられた方も多く、会は自然消滅の状態であった。

他方、ロサンゼルスについては、小野津会としてではなかったが小野津出身者を中心とした「喜界島会」が存在していることを知ることができた。この「喜界島会」は、戦前から存在した小野津会の流れを汲むものと言うことができ<sup>8)</sup>、前述の「ロサンゼルス奄美会」とはそのルーツを異にしていて別個の存在であるが、これら両方の会に加入している会員も存在する。

### 第2節 ロサンゼルス奄美会

1989年3月の調査で、アメリカに居住する奄美出身者の全般的状況を調べた結果、ロサンゼルスに多くの奄美出身者が居住していることが判明したので、筆者は同年9月、ロサンゼルスに焦点を

定めて、再度渡米して調査を行った。

ロサンゼルス奄美会では会員名簿を整理していた。筆者は会の中心メンバーの A. K. 氏及び N. K. 氏から、新旧2つの名簿を譲り受けることができた。旧名簿には43名、新名簿には47名の名前が記入されていた。旧名簿にあって新名簿にない方（つまり、移動や帰国などをしたと考えられる方々）が7名おり、逆に旧名簿になくて新名簿で新たにつけ加わった方が11名いて、双方の名簿ともに記載されている方は36名であった。両名簿の作成年は不明であるが、新名簿はごく最近と考えてよいようである。そこで、この新名簿を中心として、会員の状況についてわかる範囲で調べてみたい。

もちろん、ロサンゼルスに居住する奄美出身者のすべてがこの名簿に含まれているわけではなく、実際、筆者自信も名簿にない奄美出身者を知っているが、名簿以外の出身者がどの程度存在するかは判断する材料がないので、こうした限界を前提に、この名簿に依拠するしかないことをお断りしておきたい。

次に、名簿記載者の中で、1) 筆者が面会した会員（会の中で中心的な会員と考えてよいと思われる）、2) 名簿に住所が記載されている1) 以外の会員、3) 名簿に住所の記載のない会員、の3種類に分けて、男女別にその人数を示した（第2-2-1表）。男女別では女性の方が多く、6割以上を占めている。また、住所不明者が5名おり、住所のわかっている会員は42名であった。

次に、住所のわかっている42名の会員の居住分布をみた（第2-2-2表）。カウンティ（以下 Co. と略す）別では、ロサンゼルス Co. に19名、

第2-2-1表 種別・男女別会員数

	種別		計	割合(%)
	男	女		
筆者が面会した会員	9	0	9	19.1
住所記載のある会員	8	25	33	70.2
住所記載のない会員	1	4	5	10.6
合計	18	29	47	100.0
男女比(%)	38	62	100	

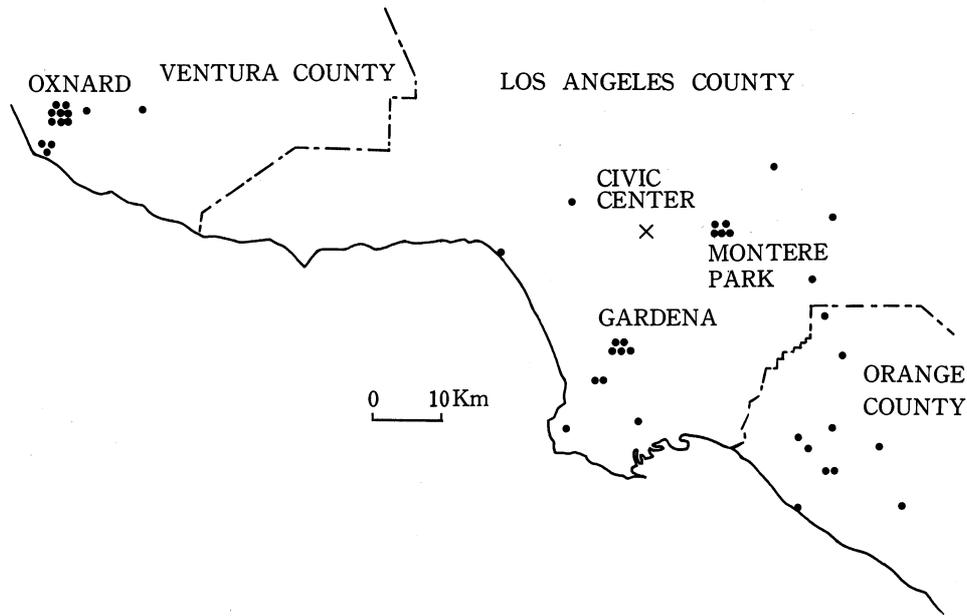
出所：会員名簿より筆者作成

第2-2-2表 会員の居住分布

カウンティ	男	女	計	割合(%)	カウンティ内の集中地区など
ロサンゼルス	10	9	19	45.2	ガーデナ5, モントレーパーク5, など
オレンジ	6	4	10	23.8	各地に分散
ヴェンチュラ	1	12	13	31.0	オックスナード8, ポートイメンヌ3, など
合計	17	25	42	100.0	

出所：会員名簿により筆者作成

オレンジ Co. に10名、ヴェンチュラ Co. に13名であって、この3つのカウンティ内に全員が居住していた。また、男女別ではヴェンチュラ Co. で特に女性が多いことが目立っている。また、これら各カウンティ内の集中地区をみると、ロサンゼルス Co. ではガーデナの5人をはじめとした南部方面に9人と1つの中心があり、また、モントレーパークの5人をはじめとした東部方面に8人ともう1つの集住地区があると言えそうである。また、ヴェンチュラ Co. ではオックスナードを中心とした地区にはほぼ集中しているが、オレンジ Co. では中西部にやや多いものの、どちらかと言うと分



第2-2-1図 ロサンゼルスにおける奄美出身者の居住分布

散的であると言えよう。

以上を全体としてみると、奄美会員の集住地区は、①ロサンゼルス南部、②ロサンゼルス東部、③オックスナード、④オレンジ中西部の4ヵ所であるとまとめることができよう。以上を分布図に示しておく(第2-2-1図)。

新名簿の内容は氏名と住所および電話番号だけであるが、旧名簿には奄美の出身地の市町村名が一部記載されていた。そこで次に、彼等の出身地について整理した。その際出身地不明者については、後述する筆者が行ったアンケートの結果やききとり等からわかったことなどもあわせて利用し、整理を行った(第2-2-3表)。

結果は名瀬市と竜郷町の出身者が多いことを示している。とくに女性にこの傾向が顕著である。以上を反

映して、島別にみても奄美大島出身者が7割以上を占めており、以下、徳之島、沖永良部島、喜界島の順ではあるが、これらの島々からの出身者の数は少なく、与論島出身者は0であった。

男性については笠利・竜郷地区にやや多いと言えるかも知れないが、他との差が大きいとも言え

第2-2-3表 奄美会員の出身地

出身地	男	女	計	割合(%)
笠利町(大島)	3	1	4	11.1
竜郷町(〃)	3	5	8	22.2
名瀬市(〃)	1	10	11	30.6
瀬戸内町(〃)	2	1	3	8.3
喜界町(喜界島)	1	1	2	5.6
徳之島町(徳之島)	1		1	2.8
天城町(〃)	2		2	5.6
伊仙町(〃)	1	1	2	5.6
和泊町(沖永良部島)	2	1	3	8.3
小計	16	20	36	100.0
不明	2	9	11	
合計	18	29	47	

出所：新・旧名簿などから筆者作成

ず、全体として奄美の各地に分散していると見ることができよう。しかし、女性の場合は名瀬市と竜郷町に明らかに集中している。これは奄美が戦後8年間、米軍政下にあったこととの関連があるようで、当時の国際結婚により渡米された方々が少なからずいることの反映かと思われる。これに対し、男性の方の出身地の分散は、それぞれが新天地での開拓や新たな生活をめざして個々独立に様々な手段やルートで渡米したことの反映かと思われるが、具体的なことはアンケートの結果に譲りたい。

### 第3章 奄美出身者の移住過程とその後の生活

#### 第1節 調査の方法及び内容

ロサンゼルスに居住する奄美出身者の移住や生活に関するより詳しい情報を得るため、筆者は、1989年9月から12月にかけて、前述した奄美会の全会員を対象に、面接による手渡し及び郵送によるアンケート調査を実施した。

調査対象者総数42名のうち、直接手渡し者は9名であり、残りの33名の方々には日本からアンケート用紙を郵送し、ロサンゼルス奄美会会長のN氏または筆者のところへ返送していただくという方法をとった。手渡しの方は、筆者のロサンゼルス到着直後に本人に面会して手渡しし、帰国までに回収するという方法であった。

調査の内容は、渡米時のこと、渡米前のこと、現在の仕事や居住、奄美会や郷里奄美との関係、生活や異文化社会の中での意見や考えなど、32項目、50余りの諸点であった。

調査の結果、最終的に回収し得た調査票は男性8名、女性6名、合計14名であり、回収率は33.3%であった。手渡しによる回収率は高かったが、郵送による場合の回収率が低かったのはやむを得ないことであろう。この結果から、全体的な傾向を論ずることはむずかしいかも知れないが、いくつかの傾向を伺い知ることはできるように思う。アンケートを整理した結果を以下で示したい。

#### 第2節 渡米時のことについて

まずはじめに、渡米経過など渡米時点の事、渡米直後の居住や仕事さらに当時の困難等についてまとめて述べよう。

##### 1) 渡米年

被調査者の渡米年についてみると、1960年代と70年代前半が最も多く、この前後の5年間でこれに次いでいて、これらでほとんどを占めている(第3-2-1表)。すなわち、大部分は日本経済の高度成長期の渡米者であるということになる。また、渡米年は同時に彼等の在米居住年数をも示しており、居住年数でみると、15年以上30年未満が最も多くなっている。既に、かなりの長期間に渡って居住していると言えよう。

## 2) 前住地

被調査者の渡米前の居住地をみると、東京が4割以上で最も多く、大阪を加えると3分の2近くになる。逆に、出身地の奄美は少ない(第3-2-2表)。この事は、彼等の渡米が奄美から直接ではなく、大都市部で一定期間居住した後、渡米したことを示している。

## 3) 同伴者

渡米の際に単独か、それとも同伴者がいたか否かについて尋ねた結果をみると、家族と一緒に2人いる他はすべて単独であり、基本的には一人で渡米している(第3-2-3表)。なお、家族と一緒に2人は、いずれも国際結婚をした者で、一人は夫と、もう一人は娘とであった。

## 4) 渡米の理由

被調査者の渡米の理由は、かなり多様であると言えよう(第3-2-4表)。内容をみていくと、「留学や専門の勉強のため」が最も多く、「家族や友人を尋ねて」が次いでおり、この2つで半数を占める。これらの理由は、はじめから永住を志したものではなく、なり行きの中で住みつくようになったものと言うことができるのではないだろうか。「出張で」の理由も、ここに含めることができよう。

これらに対し、「永住」や「一旗あげるため」は、はじめから目的がはっきりしており、また、「結婚」(国際結婚)も永住を前提としたものと見ることができよう。

つまり、全体として渡米の目的は多様であり、はじめから定住を目ざしていた者は、むしろ少なかったと言えよう。

第3-2-1表 渡米年

渡米年(居住年数)	男	女	計	割合(%)
1951-55(35-39)				
56-60(30-34)	1	1	2	14.3
61-65(25-29)	1	2	3	21.4
66-70(20-24)	3		3	21.4
71-75(15-19)	3		3	21.4
76-80(10-14)		2	2	14.3
81-85(5-9)		1	1	7.1
86-(0-4)				
計	8	6	14	100.0

出所：筆者のアンケート調査による、以下の表も同様

第3-2-2表 前住地

前住地	男	女	計	割合(%)
東京	4	2	6	42.9
大阪	1	2	3	21.4
宮崎		1	1	7.1
鹿児島 <sup>1)</sup>	1		1	7.1
奄美	2		2	14.3
沖縄		1	1	7.1
計	8	6	14	100.0

注1) 奄美を除く

第3-2-3表 渡米時の同伴者

同伴形態	男	女	計	割合(%)
単身, 1人で	8	4	12	85.7
家族と	0	2	2	14.3
計	8	6	14	100.0

第3-2-4表 渡米の理由

理由	男	女	計	割合(%)
永住	2		2	14.3
結婚		2	2	14.3
一旗あげる	1		1	7.2
日本以上の収入	1		1	7.2
勉強	2	2	4	28.6
家族・友人の訪問	1	2	3	21.4
出張	1		1	7.2
計	8	6	14	100.0

5) アメリカでの知人の有無

渡米時点で、知人など頼りにし得る人がいたかどうかについてみると、誰もいなかった者は比較的少なく、家族や親戚または友人がいたとする者が多い(第3-2-5表)。しかし、誰もいなかったとする者もいて多様であり、全体として特定の傾向があるとは言えないように思われる。

第3-2-5表 知人の有無

知人の種類	男	女	計	割合(%)
家族	1	2	3	21.4
親戚	1	1	2	14.3
友人	3	2	5	35.7
なし	3	1	4	28.6
計	8	6	14	100.0

6) 家の種類

渡米初期に居住した家についてみると、はじめから自分の持家に住んだ者も3分の1程いて少なくないが、多くは親戚、知人の家やアパート・貸家など仮の住いに住んだのであった(第3-2-6表)。なお、持家の中には両親がアメリカに住んでいたり、国際結婚によるケースも含まれている。

第3-2-6表 家の種類

家の種類	男	女	計	割合(%)
自分の持ち家	3	2	5	35.7
親戚・知人の家	1	1	2	14.3
会社の家	1		1	7.1
寮		1	1	7.1
貸家	1		1	7.1
アパート	1	2	3	21.4
安いホテル	1		1	7.1
計	8	6	14	100.0

7) 家探しの方法

未知の土地への移住者にとって、家探しは最も基本的に重要なことの1つである。そこでこの方法をみると、家族や友人に依存したケースが最も多く半数以上を占め、不動産業者や新聞広告など自力で探した者はずっと少ない(第3-2-7表)。頼りにし得る人の存在の重要性が示されていると言えよう。

第3-2-7表 家探しの方法

方法	男	女	計	割合(%)
家族・親戚による	1	3	4	28.6
友人・知人による	3	1	4	28.6
会社・大学で	1	1	2	14.3
不動産屋	2		2	14.3
新聞等(により自分で)	1	1	2	14.3
計	8	6	14	100.0

8) 当時の仕事

渡米初期に行っていた仕事をみると、学生などで労働をしていなかった者もかなりいたが、これらを除くと、レストランや病院などのサービス関係の仕事が多かったと言えよう(第3-2-8表)。また、庭園、造園などの庭師の仕事をしていた者もいるが、これは鹿児島県出身者全体の中できわめて多い仕事でもある。

第3-2-8表 渡米初期の仕事

仕事	男	女	計	割合
庭園・造園	2		2	14.3
病院・美容院	1	1	2	14.3
オーディオサービス	1		1	7.1
レストランサービス	1	1	2	14.3
日雇い労働	1		1	7.1
主婦		1	1	7.1
学生・研修	2	3	5	35.7
計	8	6	14	100.0

9) 仕事探しの方法

仕事探しも、主婦や学生などを除くと、友人、知人の紹介によることが多く、新聞等を見て自分で

探したケースは少ない(第3-2-9表)。

家探しと同様の傾向があると言えよう。

#### 10) 渡米時点での困難

以上のほかの渡米時点における諸困難についてみると、一番多いのは言葉の問題で、半数の者がこれをあげている。次いで、ビザや市民権のないことなどの不安定な地位の問題があり、また、当初は「所持金が少なくなることほど心細いことはない」ため、仕事だけに専念したことなどが来ている(第3-2-10表)。

#### 11) 言葉の克服

そこで、この言葉の困難にどのように対処し、どのように克服したかについてみると、「学校へ通った」者と「日常生活の中で自然に」克服した者とが半々程度であり、かなりの者が学校へ行ったことがわかる(第3-2-11表)。

#### 12) 予想外だったこと

以上の他、渡米後に最も予想外と感じたことについて尋ねたところ、半数近くが「特になし」と答えているものの、これ以外は様々な事柄をあげており、新たな発見や自己の先入観の訂正を行っていることがわかる(第3-2-12表)。

これらの点は、移住経験によってはじめて知るうる、日米両国間の差異に関する貴重な内容を含んでいると言えるのではなかろうか。

### 第3節 渡米前のことについて

次に、誕生から渡米に至るまでの生活等についてみよう。

第3-2-9表 仕事探しの方法

方 法	男	女	計	割合(%)
友人の紹介	1		1	7.1
知人の紹介	2	2	4	28.6
新聞等(自分で)	2	0	2	14.3
会社からの出張	1	0	1	7.1
主婦・学生	2	4	6	42.9
計	8	6	14	100.0

第3-2-10表 渡米時点での困難

困難な事柄	男	女	計	割合(%)
言葉	4	3	7	38.9
仕事のみ生活	2		2	11.1
不法滞在	3	1	4	22.2
ベトナム戦争での徴兵の心配	1		1	5.6
車社会の中での無免許		1	1	5.6
なし	1	2	3	16.7
計	11	7	18	100.0

注) 複数回答を含む

第3-2-11表 言葉の克服

克服の方法	男	女	計	割合(%)
学校へ通って	3	3	6	42.9
仕事を通して	1		1	7.1
日常生活で自然に	4	2	6	42.9
まだ克服していない		1	1	7.1
計	8	6	14	100.0

第3-2-12表 予想外だったこと

	男	女	計	割合(%)
日本で得たアメリカ知識の誤り	1		1	7.1
他人を気にしない個人の自由	1		1	7.1
土地の広さ	1		1	7.1
動植物が同じだったこと	1		1	7.1
米人の生活の慎ましさ		1	1	7.1
米人の怠慢、適当さ		1	1	7.1
日本の生活の普及		1	1	7.1
日本人がみな親戚みたいなこと		1	1	7.1
なし	4	2	6	42.9
計	8	6	14	100.0

